

図書館《私の使い方》

浅野 実菜美

皆さんは図書館をどのように使っていますか？よくご存じの方が多いと思いますが、今回は私の図書館の使い方を紹介したいと思います。

図書館は本を読むことはもちろんですが、勉強するのに最適な場所だと思います。とても静かな空間なので神経を集中することができ、周りの人が一生懸命読書したり、調べ物をしたり、文章を書いていたりする姿を見ると、自分も頑張らなくてはという気分になり、とてもいい刺激になります。

勉強の合間には気分転換をかねてビジュアル本コーナーに立ち寄ることをオススメします。そこには見るだけで楽しむことのできる様々な分野の本があり、写真や絵画やイラストなどが気分を和らげてくれてとても楽しいです。

レポートや課題に必要な本を探したい時は、図書館のホームページが役に立つと思います。本の題名が分からなくても自分が欲しい本のキーワードを入力すると、そのキーワードに関連した本が出てきます。自分の目指す本だけでなく、ついでに参考になる本も出てくるのでとても便利です。

皆さんも図書館を読書や勉強や憩いの場所として、またレポートや課題作成などの検索の場所としてぜひ利用してみてください。

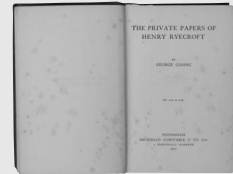
あさの みなみ(キャリア英語科2年次生)

本誌の表紙に使われた貴重書

The private papers of Henry Ryecroft, Westminster, 1903

ジョージ・ギッシング 『ヘンリー・ライクロフトの私記』

GISSING, George



イギリスの小説家ジョージ・ギッシング(1857-1903)はヨークシャーのウェイクフィールドに生まれた。幼少時から秀才として知られ、マンチェスターのオウエンズ・カレッジに入学して古典学者としての将来を期待されていたが、人助けのための窃盗行為で放校処分を受けた。しばらくアメリカで生活した後、1877年にロンドンに戻り、古典語の教授をしながら作家を志した。『三文文士』、『流謫の地に生まれて』、『余計者の女たち』などの小説で知られている。

この『ヘンリー・ライクロフトの私記』は随筆的な作品であり、ギッシングが架空の人物に託して春夏秋冬の感慨を述べている。冒頭に、ローマの詩人ホラティウスの諷刺詩から、"Hoc erat in votis (これは我が祈願の一なりき)" という句を引用していることから推測できるように、彼がかくありたいと願った境遇に自己を置いて書いたもので、ヘンリー・ライクロフトという人物を創り出し、その陰から作者が理想とする生活を描き出している。ちなみに、本書は1903年に出版された初版本である。

この作品の主人公ヘンリー・ライクロフトは貧困のうちに作家生活を続けていたが、50歳の時に思いがけず遺産が手に入ったので、南イングランドのデヴォンシャーに移って田園生活を始め、季節とともに微妙に変化する自然の移り変わりを楽しみながら、本を友として悠々自適の日々を過ごすことになる。5年後には永遠の眠りにつくが、その間に気の向くままに書きためていた文章をギッシングが発見してそれを春夏秋冬の4章に分け、一冊にまとめたという形をとっている。

自然観、古典への傾倒など日本の『方丈記』や『徒然草』といった随筆文学の伝統に通じるものがあり、日本では多くの読書人に歓迎された。1909(明治42)年7月号の雑誌『趣味』に戸川秋骨の抄訳『田園生活』が掲載されてから、多くの翻訳本が出版され教科書にも採用された。

原寸 19.5X12.6cm

『洋書百選』(1972年本学図書館刊行)より抜粋、加筆